

精神科医の思うこと③⑧

京都のおひと

松村 奈奈子

ちょっと前に、自宅マンション近くの老舗の扇子屋さんで何やら映画撮影をしていました。すごくコソコソとされていて、何の映画かさっぱりわかりません。近所のカフェの店長に聞いても「私も気になっているんです。映画関係の人がご飯を食べには来るけど、何の映画かは聞いても教えてくれないんですよ」と笑います。どんな映画なんだろうとワクワクしていたら、今年の6月公開となった「ぶが漬けどうどす」という、京都の老舗扇子屋に東京から嫁いだ嫁と、室井滋演じる義母や京都の人々とトラブルを・・・てな感じのコメディ映画でした。もちろん映画は見に行って「イヤ～まあ、なかなかの京都やね」という感じですが、私も「京都のおひと」には思う事があるので、今回のテーマは「京都のおひと」

大学に進学するまで大阪で生まれ育った私ですが、京都に就職して京都人と結婚して、人生の半分以上をずっと京都で生活しています。それでも自分が京都人という意識はなくて、物事ははっきり言う大阪人のままだなあと思っております。まだまだ「よそ者」でございます。

ただ、「京都」がスゴイなあと思う事はしばしばで、旅先で「どこから来たんですか？」と聞かれ「京都です」と答えると「こんなところより、京都の方がみるものたくさんあるのに」「京都は好きで、よく旅行に行きます」「京都には行ってみたいです」と京都リスペクトなお返事を頂くことしきりで、なんだか恐縮してしまう事も多いです。

友人の勧めで「一澤信三郎帆布」という老舗かばん屋さんの手提げカバンを使い始めて、もう20年近く同じカバンを買い替えて使っています。丈夫でいいカバンなのですが、店舗は京都にしかありません。ときどき旅先で「京都からいらしたんですか？」と聞かれて「ええ、どうしてわかるんですか？」「京都のかばん屋さんのをお持ちなので・・・」と言われると、京都のブランド力すごーいと思ってしまいます。

ただ、一方で、京都人なかなかプライドが高い。

京都市内の病院に勤務している時、精神科の診察の場では患者さんのお仕事などもお聞きす

るのですが「お仕事は何をされていますか?」「〇〇寺に務めているので、自宅もその近所です」「〇〇寺?」「えっ、〇〇寺も知らないんですか!!」とか、「△△漬物を経営しているんです」「△△漬物?」「△△漬物を知らないんですか!!」などなど怒られたことがあります。いやいや、清水寺とか金閣寺とか超有名なお寺じゃないんですよー、漬物屋さんもいっぱいあるし、わかりませんよー。ただ、その後京都府北部や郊外の病院に勤務した時は、そんなやりとりは全くなかったんで、京都市内にお住みの患者さんだけの反応でした。

さらに、大阪人の私、物の値段に興味津々でつい「その服なんぼでかったん?」「そのマンションの家賃いくらなん?」と聞いてしまい「京都人はそんなに答えません」と友達に怒られたこともあります。まじっ、これが京都かーとシミジミ考えてしまいます。大阪人に聞いて怒られた事はありませんし、むしろ「これなんぼで買ったと思う?」と聞かれて「上手な買いもんしたんやろ」と自慢話が始まる大阪人多いです。これはこれで、大阪人のアカンところでもあるんですけどね。

診察の場面でも、京都ならではの患者さんを診る事もあります。

今回の映画の主人公である東京から来たお嫁さんは、老舗の女将に怒られてもなかなかメンタル強めで元気でしたが、京都になじめずに精神科を受診する若いお嫁さんを何人か診察したことがあります。多くは、京都老舗の長男が関東の大学に進学し、学生時代に出会った関東の女性が嫁いでこられたケースでした。「老舗の若女将」は誰もができるわけではなく、いろんな能力がいるんだと思います。頼れる実家も友人もみんな関東で、いきなり知らない京都で生活するだけでも大変なのに、「老舗の若女将」としての仕事は大きな負担で、老舗の長男がシッカリしていない場合、孤立して精神科を頼るしかないのかなぁと思います。

京都の郊外の病院に勤務している時、ある患者さんが、娘さんが京都の老舗の着物屋さんに嫁いでいる話をされました。「私はたよりないんで、こんなんでもうつ病とかになっちゃったんですが、娘は老舗に嫁いで、お義母さんと上手にやってるんです。嫁ぐときに、しっかりしたお義母さんやったんで心配して『辛かったら帰ってきてでもいいで』と言ったくらいです。でも、お義母さんとケンカせんと、子育てもお店の難しい仕事もこなしてて、祇園祭の時は祭りのお手伝いもせんといかんみたいで、大変やったみたい。祭りの後は、孫と一緒に私のところに帰ってきて寝てましたわ。でも、ほんまよう頑張ってて、自慢の娘です」と話された時、やっぱ京都老舗は京都の人でもハードルが高いんやなぁと思いました。

ただ、京都の真ん中に生活してみて、ほんと京都ってスゴイなぁと思います。映画の舞台となった老舗扇子屋さん、実は跡取り娘さんがおられて、いろいろイベントを企画してくれたりで面白いお店です。「能」に使われる扇子も取り扱っているようで、お店の2階の広間で能楽の先生をよんで軽いミニライブ的なものを時々企画されていて、お店に貼ったチラシをみて近所の方々に交じって私も参加した事があります。初めての老舗扇子屋さん訪問、京町屋の典型的な

縦長のお家で、奥に入るとおくどさん(かまど)があって、中庭があって、「おー、中はこんな感じやったんか」と感動した覚えがあります。「能楽」のイベントも勉強になりました。

老舗扇子屋さんのちょっと先の並びに、古民家を改装した美容室ができて、通っていたのですが、美容師さんと仲良くなると、古民家の中を探検させてくれるようになりました。美容室には地下に「防空壕」があって、今はオシャレなギャラリーに改装されていたのですが「防空壕」の感じはそのまま、「古民家の地下に防空壕があるなんて」と見学して感動しました。

私はマンション住まいで、直接自治会などと深い交流は無く、未だ「お客さん」な感じですが、京都の真ん中に生活していると、京都の奥深さや歴史を享受させて頂く事が多くて、楽しませて頂いています。

コロナで緊急事態宣言がでて、「京都から出るな」となった時は、不謹慎で申し訳ないのですが、散歩がてら今まで行ったことのない京都の神社仏閣や街並みを散策できて、改めてじっくり京都を勉強する時間となりました。近所だけでも回り切れない程の神社仏閣があり、それぞれの歴史を勉強すると、日本史の教科書に載っている様な人物と関連していたりと「さすが京都」と感服します。まだまだ訪ねていない名所もたくさん残っていて、ほんとこれからも京都散策を続けていきたいと思います。京都は今、観光客であふれていますが、繰り返し訪れたくなる魅力は、よくわかります。

で、京都のおひと。

生粋の京都女子とご飯を食べている時「東京に出張で行った時、銀座の天ぷら屋さんでご飯を食べるのが好きなんです。いつも一人で静かに食べ終わった後、最後につ『おおきに』って言ってお店を出るんですよ。ふふっ」と彼女が微笑みながら話します。ほんと、いつもおしとやかな彼女ですが、奥底の京都人魂が見えた気がしました。「最後に京都から来ている事をさりげなくアピールして店を出るんですね」と言うと、彼女は「ふふふ」とまた微笑みます。すごいなー、お江戸で「京都から来てるんですけど自慢」ですか。いやー、やるなー京都人。

大阪人の私、「大阪から来てますよ自慢」などしようと思った事ありません。むしろ、すみません、お江戸を散歩させてもらってますってな感じです。

「最後に京都アピール」とは、ほんま「京都のおひと」はすごいです。

☆ぶぶ漬けどうぞ…京都弁で「お茶漬けどうですか？」という意味。「そろそろお帰り下さい」と遠回しに伝える京都の「本音と建前」を表す言葉。